

第3回 静岡市市民活動促進協議会（第9期） 会議録

1. 開催日時 令和6年3月18日（月） 14時から16時まで
2. 開催場所 静岡市葵消防署 7階 講堂
3. 出席者 (1) 講師 ①NPO 法人アクションポート横浜
代表理事 高城 芳之 様
②菊川市市民協働センター
センター長 笠原 活世 様
(2) 出席委員 山本副会長、大谷委員、小笠原委員、加藤委員
川村 栄司委員、川村 美智委員、北川委員、
木下委員、田中委員、殿岡委員、久野委員
(3) 事務局 田中係長、望月主任主事

4. 傍聴者 2人

5. 内 容

(1) 会議の成立及び公開

委員12名中、11名の出席があるため、条例第14条第2項の規定により会議が成立していることを確認した。また、会議の傍聴及び会議録は公開するものとし、非公開とすべき事項が生じた場合に、その都度、その旨の決定することを確認した。

(2) 議長代理

条例第13条第4項により、「会長が議長を務める」ことになっているが、山岡会長欠席のため、同条第5項の規定により、山本副会長が議長の代理を務めることを確認した。

(3) 議 事

(山本副会長)

本日は市外から2名のゲストをお招きしております。まずはNPO法人アクションポート横浜 代表理事 高城芳之さん。お二方目は菊川市主市民協働センターセンター長の笠原活世さんです。

今日の全体の流れですが、それぞれ30分ずつお話を伺います。その後、質疑応答や、ゲストのお二方も交えた意見交換をいたします。

それぞれの地域における市民活動センターや中間支援の取り組みについて、皆さんと共有し、これから静岡市の市民活動センターに求められる役割についてイメージを膨らませて参りたいと思います。正直申し上げて市民活動はわかりづらく、中間支援というものが何をするのかという答えもなく、どう議論していいのかわから

ないという方もいらっしゃると思います。率直な質問で結構ですので、お二方に向けてぶつけていただきますと嬉しいです。

それではまず、高城さん、よろしくお願いいたします。

(高城さん講演)

「これからの市民活動センターに求められる役割について（横浜市の事例から）」

(山本副会長)

横浜市は、全国でも市民活動の先行事例が多く、私が学生のころは、聖地のような場所でした。ただ、やっぱりそのままでは立ち行かない。変わり続けなければ維持できないというのが今日わかったような気がします。

また、未来の事例もいろいろお話いただきましたが、全てをいちNPOでやろうとしていない。高城さん自身が、繋ぎ合うことで力を出すんだというはっきりとした自団体の活動を見据えているのが、大変未来的だなと、私は個人的に考え、受け止めています。

それでは続いて笠原さんのお話を伺います。

(笠原さん講演)

「これからの市民活動センターに求められる役割について（菊川市の事例から）」

(山本副会長)

菊川市市民協働センターは、若々しいセンターです。静岡市の市民活動センターと比べて、2点だけ確実に違うことがあるなど、お聞きして感じました。

1つは、若者をテーマにしている、それを菊川市も許容し、両者が意見を合わせているというところ。もう1つは、政策提言まで持ってきていること。これについて笠原さんは、さらりとおっしゃいましたが、そうそうないものと思います。菊川のこれからの市政を変えたのではないかと思います。

今、菊川市では、若者たちが、まちを変えてくれるのではないかと期待まで担っているという素晴らしいプロジェクトだと感じました。

ぜひ皆さんからご質問でも、率直なコメントでも結構です。皆さんが思ったところをまず言ってみようというものでも構いませんので、ご発言いただければなと思います。

(田中委員)

菊川市の笠原さんに質問したいのですが、菊川市に大学がないと伺いました。地域

の課題として、菊川市の20代の女性は、都心に行ってしまったら戻ってこないとありますが、もう少し現状を詳しくお伺いできますでしょうか。

(笠原さん)

静岡県全体で20代の女性の転出が多くあって、転出率は高い水準にあると聞いています。菊川市では人口流出の問題として、そんなに叫ばれているわけではないのが現状です。

菊川まちづくり部はお伝えしたように、高校生だけでなく大学生世代・若者も参加しています。大学のない菊川市ですが、主にきくがわ高校生まちづくりスクールに参加した生徒たちが、大学生になっても自主的に菊川まちづくり部に入部し継続して活動を続けています。発足した昨年度は大学生6人のうち菊川市在住の学生は1名、今年度は8名のうち2名です。静岡県立大学、静岡大学、常葉大学に進学した牧之原市や藤枝市、掛川市在住の学生が参加しています。菊川市でこういう経験をしていけば、いずれ自分の地元でも、同じような活動をしたいかならぬかと考えています。

(田中委員)

菊川市で活動した優秀な学生は、現在首都圏へ行ってしまって、そちらで活躍というようになってしまうと非常にもったいないので、戻ってきてもらう策を考えてほしいと思いました。せっかく良い人材が育ってきているので、それがきちんと定着する仕組みというものも欲しいと思います。

(笠原さん)

実際大学生の選択については、ものすごく変わってきています。まちづくりや都市計画や地域課題の分野などが、学びの選択として出てきていますし、他都市の大学へ進学してもオンラインとリアルを使い分けながら活動を続ける子も出てきました。

(木下委員)

昨年度、静岡市市民活動促進基本計画を作るための協議をした中で、市民が当事者性を持って社会に関わる機会を応援する、NPO側が、市民が参加してくるのを待つのではなくて、自分たち自身から向かう、という点が重なっていたと思いました。

また、「中間支援」というときに、エリアを面で見ると中間支援と、分野で横断型にエリアを包含し、全国ネットワークや県内ネットワークという形で、分野に繋がるネットワークと、性格として二つあって、そこにNPOはどちらでもかかわれる、様々な形があると、NPOは色々な情報や人脈を得ることができ、非常に良いことではないかと思っています。静岡市の市民活動センターを考えると、基本的にはエリア型かと思

いますが、そこにいかに横断型に、横串を指すことを機能として拡充できるかどうかは、一つのポイントだと思いました。

菊川市は、私も施設を訪れたことがあります。子ども・若者の参画に関してはいろいろな参加のポイントが用意されていて、最終的に政策提言につながる場所もすごく大事だと感じます。出口として、本当に社会を変えられるとか、まちを変えられるという点がすごくいいなと感じました。

ここで考えたいのが、中間支援という機能が分かりにくかったり、多様ななかで、菊川市や横浜市でも同様かと思いますが、行政と関わったり、他の人へのアピールするときに、中間支援の評価というものを、どういう基準、視点でしていくのかという点を考えていく必要があると思います。

静岡市の市民活動センターの在り方を考える時に、委託した内容を評価する尺度について、どういった点があると望ましいのか。

菊川市は委託で業務を実施していますが、数年間やってきた中で、どういう観点で評価を受けているのかお伺いしたいです。

(笠原さん)

菊川市は、評価指標について行政と相談しながら決めました。最初は、行政側から「相談件数」で評価をしようという案が出ましたが、相談件数は、センター側が努力して増える数値ではないため、それはちょっと待ってください。とお伝えしました。一方で協働のマッチング数や登録団体というのは、センター側からのほたらきによって伸びる数字ですので、こちらを評価してくださいと、センター側からお願いしました。

(高城さん)

横浜市は、18区にあるセンター評価をする事業を行うと聞いています。評価という点では、横浜市行政も悩まれているのではないかと思います。

ただ、先ほどの話で、NPO 自体の評価を今一度見直した方がいいのではないかとすることは思っています。助成金も然りですが、成果型だったりとか、例えば目に見える数字や、新しいことをやらなければ、次の助成金につかないとか。そういったことが参加型とは逆の動きになっている気がします。

先ほどおっしゃってくださったように、参加型でやっていくもの、成果を出していくもの、もちろん成果を出しながら課題を解決していくという性格もあるので、それはそれで大事なことですけれども。今は助成金などの評価がそちらに偏っていることが、市民参加型のNPOが減ってきている要因ではないか思いますので、市民活動センターも然り、見直した方がいいのかなと感じます。

(山本副会長)

私も評価指標については、大変悩ましいのではないかと考えていますので、今の話題はとても参考になりました。やはり計測性という観点も指標では大事なので、あまり吃驚で取りにくい指標を出すよりも、本質的にシンプルで、計測できる数字、定性的なことが指標になるのかという問題もありますが、何か新しい基軸の指標を出すことは、これから全国的にも注目されるものになるだろうなと思っています。議論を深めていきたいと改めて思いました。

(川村栄司委員)

2人の話の中で共通しているのは、若者が関わっていく仕掛けを作っているという点がありますが、やはり地域特性をどうやって活かすかが、その前提になっているのではないかと思います。横浜市は人口377万、一方菊川市は4万7千人のいわゆる地方都市というもので、ここに大きな違いがあって、若者ということで共通項がありますが、横浜市の場合には、資料に載っている大学だけでも10校ありました。こうした環境の中だと、特に大学生がメインになるのではないかと聞きながら思いました。一方菊川市では、高校2校、中学校4校、小学校9校ということで、より若い層が参画していると見えました。

静岡市の場合、その中間ということですが、政令指定都市の中では一番小さい都市になります。ただエリアが広いという特徴があり、また、横浜市ほどではないけれども大学もあるというなかで、横浜市と菊川市のことを参考にしながら、どういう地域に合った市民活動センターの在り方が考えられるのかなと思いました。

(山本副会長)

まさに地域特性の違う講師のお話を聴けてよかったなと思います。また横浜市と菊川市では、歴史が全く異なり、今、産声を上げてすくすく育っている菊川市の市民協働センターと、何世代目かに入っているという横浜市。

その中で、静岡は今どうなのか。これからどんな未来を見たいかを考える。単純に横浜市と菊川市の真ん中でもないような気がする。皆さんの考える糸口として、ぜひこの事例を参考にさせていただければなと思います。

(川村美智委員)

菊川市の例でお聞きしたいのですが、政策提言に持って行けた経緯についてももう少し詳しく教えてください。静岡市では中学校の探究の学習で、地域課題についてこうしたらいいという発表を聞く機会がありますが、行政の政策提言へと練り上げた事例はあまり聞きません。中間支援的なNPOがうまくまとめ役として動いてらっしゃると思いますが、行政の関わり方など、いかがでしょうか。

(笠原さん)

政策提言の前段階として、市政懇談会への参画というものがありません。これは菊川市の営業戦略課が行っている事業なのですが、その係長がセンターに相談に来ました。市政懇談会の前身は、まちづくり懇談会というもので、市長が市内 11 地区に足を運び、市の事業について市長や幹部が説明するというものでした。参加者は自治会長等、地区の代表者の方々に、どうしても質問や意見が一方的になっていたそうです。担当の係長は、この空気を変えていきたいということでセンターへ相談にきました。そこで、若者をその会に入れることで何かしら変わるんじゃないかという提案をしました。市政懇談会は、開始して2年目なのですが、若者には受付スタッフとして入ってもらおうとか、参加メンバーの一員として議論に参加してもらおうなどを担ってもらっています。

そもそも高校生まちづくりスクールや未来塾は公開プレゼンテーションなのですが、市長はこういった分野がお好きなので、開催すると必ず参加してくれます。去年は10月ごろに高校生まちづくりスクールと菊川まちづくり部の事業報告公開プレゼンを一緒に行ったのですが、市長と静岡大学の井柳教授にコメンテーターを担っていただきました。

市長が若者のやることに非常に興味を持ってきていることと、また、菊川市は、観光交流人口がすごく低いです。小さい観光地はありますが、これで人を呼び込めるという観光資源が不足しているので、市民活動や若者の活動が活発になることで、当事者意識を持った人達が増えて、それを政策提言に結び付けていったのかなと思います。

高校生まちづくりスクールに参加した生徒たちも、自分たちが動けば地域やまちが変わっていくという実感を得ることが出来て、そういう子たちの言うことなので、行政側も聴こう、活かしていこうという姿勢になってきてきているのではないかと思います。

(山本副会長)

やはり笠原さんがイメージ持って動かれているところが大きいと思います。

(北川委員)

笠原さんにお聞きしたいですけれども、行政が若者を中心にこれらの連携を実施していくという時に、資料には、企業などもそこに参画しているということが記載してありましたが、企業がこうした活動をどのように支援していけるのか、今かかわっているという実例や、今後必要になってくるという点があれば教えてください。

(笠原さん)

企業とのかかわりとは、まだまだこれからだなと考えています。

企業向けにはCSR活動相談会というのを開催しています。地元の企業の方が参加していただき、今後どのように進めていったらいいでしょうかといった相談を受けています。ある会社に取り組みを見える化することをお勧めしたところ、「CSR推進本部」といった部署を立ち上げて、熱心に活動してらっしゃるという事例もあります。

また企業と行政の協働研修として、顔合わせのようなマッチングしやすい形式で実施しています。将来的なビジョンというより、まずは知ってもらうというところに特化して活動をしているところです。

企業との協働研修も開いたら、企業側が必ず来てくれるというわけでもなくて、地道に声をかけながら呼び込んでいくというのが現状です。企業と行政のマッチング、共創事業は市で行っているのでも、私たちは、もっと企業が地域とのかかわりを増やしてもらうという視点で動いています。

また未来塾に参加する大学生からは、菊川市内で就職活動の情報がなかなか入ってこないという意見を聴きまして、高校生と大学生向けの地元企業説明会を大学生の企画で実施したりして、身近なところで企業を呼び込むことを行っています。

(北川委員)

行政と企業との包括連携協定の枠組みのなかで、社会課題の解決に向けたNPOの取組への橋渡しが増えていけば、企業の方も、そうした取組への支援がしやすくなるという印象を受けました。

(久野委員)

この協議会に参加して、初めて「中間支援」という言葉を耳にしました。この場にいる人は、中間支援という言葉をしっかり理解しているのかもしれませんが、一歩外に出ると中間支援という言葉を知らない人は沢山いるだろうと感じています。それくらい市民活動を行っている人としていない人には乖離が生じていると思います。

今日の説明を受けて、NPO法人を長生きさせるために活動するということではなくて、市民のために活動しているということを、市民自身が分かっているといけな。市民自身の意識を変えていくことがすごく大事だなと思いました。意識を変化させていけないから、活動の停滞や、高齢化に繋がっていくのかなとも思いました。好きなことだけやったら人は成長しませんし、人を成長させていくためにも、変化は必要だと考えました。

高城さんから「インターンシップ先に、その分野に興味のない人をあえて送り込んだら、すごくよかったという感想が多くあった」というお話を伺って、同じような経

験が私自身もありまして。静岡市については、若者に限定せずとも、市民活動センターは、新しいことに取り組む場としての拠点として受け入れてもらえるようになったらいいなと思いました。

(高城さん)

とても大事なポイントであると思います。NPOが、「ボランティアに参加しませんか」と自分たちの活動への呼びかけはしますが、自分から相手の方には出ていかないということがあります。中間支援、コーディネーター等はまさに、相手の中へ飛び込んで、相手の文化の中で何が出来るかということを考えないといけないのですが、どうしても「こっちに来て」となりがちです。

インターンシップという言葉は、学生向けです。やっていることはボランティア体験なのですが、ボランティア体験と言っても、学生は参加してくれません。統計的にもボランティアを経験している学生は少ないですが、インターンシップを体験している学生は、今すごく多いです。やはり、そういう言葉が大事だと思います。

相手の言葉で紹介して、中身は一緒なのですが、まずは触れてもらうこと。食べてもらってから、美味しいとか、まずいとか、よくわからないとか、そういう話をしていくべきなのですが、その入り口にも立っていないことが、横浜市で僕が悩んでいることの1つです。

それは企業、行政、もちろん市民のどの立場から見ても同じで、接点をどうやって作っていくのかといったときに、何がその人たちにとって一歩を踏み出しやすいものなのかというのは、常に考えながら動いていかないと、裾野が広がっていかないのではないかと考えます。

(久野委員)

お金に余裕のある高齢者じゃないとボランティアや市民活動が出来ないと思われてしまう構造になっていることは、良くないと思います。市民活動はお金持ちの楽しみではないですけど、時間が無いとやはり出来ません。うまくバランスが取れるといいなと思います。そのための支援も同じように行えたらよいのですが、やりがい搾取のようになってしまうのも問題になるのかなと考えます。

(山本副会長)

「NPO法人長生きセンター」ではない、というのはとても刺さる言葉で、その通りだと思っています。

(殿岡委員)

横浜の方では、オンライン会議で、菊川市ではみんなで集まって、地域課題を話し

合うということでしたが、地域課題というのは、その場で、何かありますかという提案型なのか、それともあらかじめ決めておいて提示する形なのか、その点を教えていただきたいです。

(笠原さん)

「高校生まちづくりスクール」や「未来塾」などは、こちらから課題を提供したことは全くなく、興味を持ったものや課題だと思ったものを出し合いながら、共感した者同士はグループになったり、1人で取り組んだりしています。誰かから与えられた課題を「やらされ感」で取り組むことがないようにしています。課題はさまざまですが、同じ思いを持つ人はおり、そうした活動自体のサポートは、センターが積極的に行っています。

(高城さん)

横浜の場合は、「課題」というものが、生活のものから広域のものまであって、それが共有できていないということが一番の課題だと考えます。

例えばみなとみらいのような繁華街にも課題はありますし、住宅エリアも、一軒家ばかりの地域もあれば、団地や古くからのエリアもあります。また駅から遠いエリアとアクセスは近いけれど、地域の中ですごく密集しているという課題を抱えている地域もあります。横浜に関して言うと、そういった1つ1つの課題というのが、エリアや分野で見えていかないと、全体で共有することは難しい。そのため、横浜市が出す市民活動支援に関する指針も、全体に共有して平均値をとるため、ぼやけてしまっています。

課題解決ばかりがNPOではなく、価値を創出したり、文化を守ることもあったりしますが、そういったことを、そのエリアで気づいた人たちがまずは動いていかないと、生活のしにくさといった課題は解決していかないのではないかとすることは、いつも話をしていることです。

(加藤委員)

お二方の講演を聴いて、いろいろなキーワードがありました。メンバーの固定化ということでは、長い期間で固定化していると、新しい意見や視点が入ってこないということや、また、センターだけで取り組んでいるのではなく、色々なところと繋がりがあって活動されていて、すごく勉強になりました。

菊川市市民協働センターには、放課後立ち寄れるフリースペースがあるということで、今までPRしたことないとおっしゃっていましたが、1日に約100人から150人利用者がいるということもお話されていたと思います。利用者が増えていった経緯について教えていただければと思います。

(笠原さん)

フリースペースについてPRしたことはないのですが、口コミで広がったものだと考えています。フリースペースは、学生にとって、居心地の良い場所でありたいと考えています。学校でも、放課後勉強できる場所が開放されますが、携帯の使用が禁止だったり、図書館は私語禁止だったり制限があります。一方でフリースペースでは、飲食も私語も自由ですし、特にルールは設けていません。菊川駅から近く、親が迎えに来るまで、市外も含めていろいろな学校の生徒が集まるので、中学時代の友達と再会できる、といった話も聞きますので、口コミで広がっていったと思っています。

中学生については、兄妹から聞いて、利用し始めたという話をよく聞きます。利用する人数にも、中学生と高校生で違いがあります。中学生はテスト前の休日などに集団で来ていることが多いですが、高校生は個人で利用する人もいます。

(加藤委員)

フリースペースのような敷居が低いところは、すごくいいなと思います。静岡市の市民活動センターは、市民活動をしている人が行くイメージが強く、誰が訪れてもいいと思うのですが、なかなか行きにくい感じがします。誰でも気軽に立ち寄れる場所があると、活動している人に会えたり、イベントが目に入ってきたり、興味を持つことに繋がっていくのではないかなと思います。

また、「きくる」という愛称もいいと思いました。そういうものがあると、「今日、きくる行く？」といったように会話にも出やすいのかなと思いました。

(山本副会長)

委員の皆さんも是非、菊川市のセンターへ行ってみてください。とても居心地の良い場所です。

(小笠原委員)

学生の「やりたい」という気持ちって無敵だなと思っています。心理的安全性がある地域で、学生たちのやりたいなと思うことを捨て、広げてくれる。自分の気持ちを汲んでくれる場所や人がいることは、とても良いことだと思います。若者と地域がつながることはとても大切だなと思うので、自分が中高生の時に、菊川市のような取り組みがあったらよかったなと思いました。

横浜の方は、学生の半数が潜在的関心層といわれることにびっくりしました。

私の所属する団体は、ボランティア系なので、私自身もボランティアに興味を持って参加したのですが、単位が取れるからやってみようと思う人もいます。

また、就労支援の団体でボランティアもやっていますが、携わっている学生は、あ

まりボランティアとっておらず、自分のためになるし、経験になるし、社会に出る準備や、自分の成長になるから活動に参加しているという面が多く、ボランティアとイコールにはなっていないという印象です。

学生に興味を持ってもらうきっかけとして、体験した学生の口コミを紙で見ると、その人の口から聞くのとでは違うと思っています。体験した人の生の声を聴くと、学生は、ボランティアやインターンシップへの参加や興味を持つ人が増えるのではないかなと思いました。

(大谷委員)

NPO インターンシップについて伺いたいのですが、今の若者は選挙の投票率低迷など政治に関心が薄いと言われていますが、NPO 法でいう 20 の活動分野のうち、学生はどういった分野に興味を持って参加していますか。また、企業との協働についても、もう少し詳しく教えてください。

(高城さん)

インターンシップのマッチングについて、学生の興味関心が高い分野は毎年波がありますが、参加しやすい青少年系や子ども、国際系に興味を示す学生は多いです。関心があまり高くない分野は福祉です。なぜなら福祉に関心がある学生は、実習があるので、わざわざインターンシップを利用しないからです。

インターンシップを実施する前にマッチング会を行います。学生に向けてNPO が色々なPRをしますが、活動に関する素晴らしいプレゼンも、必ずしも学生に響くわけではなく、説明者に若い人を連れてきたり、学生の興味を示すようなことをするほうが人は集まったりして、必ずしも分野で選ばれているばかりでもないというのが現状です。

企業との連携ですが、横浜市は、中小企業も多いですが、企業の支社、支店が多くあります。特にそうした企業は、CSRやSDGs といった社会貢献をしていかななくてはならないのですが、人材が限られているので、自分たちができることが少なく、ほとんどゴミ拾いになってしまっているということが課題となっており、ご相談をいただくことが多いです。企業の方々がお互い集まって得意なものを生かして、社会貢献をするイベントを組み立てたり、若手の社員が学生とともにボランティア体験をするといったこともしています。

(大谷委員)

菊川市で市民協働センターを開設する際に、菊川駅の近くといった好条件の場所が選定された経緯について教えてください。

また外国人との関わりについて、子どもは学校教育等で市民と関わりが生まれると

と思いますが、就労している外国人については、何か関わりはお持ちでしょうか。

(笠原さん)

菊川市は市民協働センターについて、市民にとって大事なものと尊重してくださったり、設計段階から市民の声を聴いて、いろいろな変更もして下さったり、市民の声を大事にしてくれている市だなと思います。

外国人とのかかわりですが、市内でブラジル人学校を運営しながら日本とブラジルの国際交流のNPOを運営している方と交流させてもらっています。

菊川市では外国人を大事にするという体制を取っており、センターの隣には外国人相談窓口を設置しています。窓口には通訳さんがいるため、センターに相談が来たら、通訳さんを交えてすぐに相談に乗れる体制を取っています。また別の業務として市から受けているのですが、基幹産業であるお茶のPRとして、去年は多文化共生をテーマにしたイベントを開催しました。

センターだけではなく、市が全体として外国人を受け入れるスタンスであり、学校でも先生も生徒も外国人を受け入れる体制を取っており、スムーズな受け入れができています。

(山本副会長)

今回の講演内容は、私たちに課せられている議題に対して、これ以上ないほどの素材をいただいたと思います。今日得られた知識や感じたことを、今後の議事に活かしていきましょう。

それでは、本日の議事は以上となりますので、進行を事務局にお返しします。